

魅力ある「山形の箱」提供

江戸時代、山形城下町大通り三の丸東門現・山形中央郵便局に薬屋として創業、明治に入り紙器製造業に転換。さらにシルクスクリーン印刷や看板製作、デザイン企画・製作・施工を手掛ける総合広告業へと事業を拡大している(株)大坂屋を訪問。第14代となる青山治右衛門代表取締役会長に、代々同社に伝わる商いの心得などをうかがった。



「薄荷錠」の小箱セット

明治27年(1894)に紙器製造業を始めた第12代青山治右衛門が、山形の薬局用に作った「薄荷錠」の小箱セットが保存されている。赤、青、緑の化粧箱に店のマークを水玉模様

デザイン。高級感があり百数十年経った今でも寸分狂わない見事な仕事だ。

治右衛門という古風な名が示す通り、青山家の歴史は江戸中期の享保年間(1716〜36年)まで遡る。

山形城下町十日町(元自衛隊山形地方協力本部)で醤油醸造業を営んでいた本家・青山善左衛門家から分家して、三の丸東口で薬種商を開いたのが始まりです。「大坂屋」の名前は、分家当時に大坂の商人に屋敷の一部を貸しており、商人が山形を離れたのち、その屋号を引き継いだと伝えられています(青山治右衛門代表取締役会長)。

北前船で酒田に運び、最上川舟運で近江から仕入れた漢方薬や和紙、容器(曲げ物)を扱った。山形藩が商いを認めた「鑑札」、漢方の商品名「

粒金龍丹」や動悸・息切れ・胃腸虚弱に効く「萬病感應丸」を刻んだ看板、「御薬種賣所」のハンコが残っている。

しかし、明治27年5月26日、山形市南部一帯を焼き尽くした「市南大火」で店屋敷は灰燼に帰す。前後して通信省が山形市中心部に郵便局本局を設置することとなり、敷地の4分の3(約3300平方メートル)を売却。残りの敷地で薬種商から、漢方薬を小分けする容器製造に業務を転換した。山形における紙器製造業の走りであった。

創業者の祖父は研修熱心でした。山形から福島まで徒歩で行き、そこから東北線に乗って東京に向かい、百貨店三越でデザインを学びました。13代の父は米軍の空襲による延焼を防ぐため屋敷、工場が取り壊され、機械類もすべて軍に供出するといっ

た状況に置かれて戦後の一時は途方に暮れていたようですが、周囲にハッパを掛けられて一念発起し、たった1人で、街を回って注文を取り、作った箱を背負って配達しました(同)。

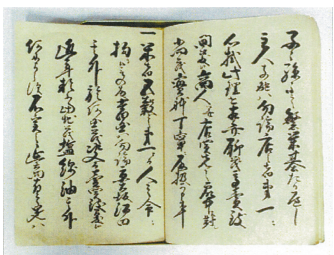
昭和51年(1976)、郵便番号の導入に伴って、郵便局は自動選別機導入がスペース必要となった。また、十日町前の大通りが一方通行となったこともあり、企業の将来を考えたことでもあり、移転した。山形市立商業高校を卒業し家業を継いだ青山会長は、郊外の新天地で魅力ある箱を提供するとともに、印刷・看板業に進出道路標識や防災サイン製作に乗り出しさらにバス、トラックをはじめ、飛行機、電車・新幹線のマーケティング。店舗の看板や壁面広告・窓広告制作に取り組んでいる。営業範囲は東北一円から関東方面に及ぶ。



代々伝わる「御得意様ご繁昌」を心掛けて、社員と共にオーダーメイドの「山形の箱」を製造している第14代青山治右衛門会長(右から2人目)と青山祐一社長(中央)



大坂屋が手掛けた㈱でん六の広告看板(山形市清住町)



青山家中興の祖が残した家訓「永代条目」



薬種商時代の「萬病感應丸」の看板

昌最優先」を置く。その由縁は寛政8年(1797)、4代、5代の治右衛門連名の「永代条目」にある。「黒染めの木綿を着なさい」「品物は吟味し、なるべく安く売らなさい」「米は人の命にかかわるもの。当地はもとより京大坂、酒田ほかどこでも決して手を出してはならぬ」など贅言をせず、小さな事を積み重ねよという心得を説いている。

祖父もまた「仕入れの支払は毎月ゼロにせよ」「値段の交渉はやっても良いが、決まったら1円の端数まできちっと払え」「職人の手間は値切らず、逆に2割高く払え」を信条としていました。顧客や職人を大切にすることが、企業の永続につながるという心でしよう(同)。

正月には江戸時代から伝わる「御得意繁昌の掛け軸を掛け、全社員が先人の教えを肝に銘じている。現代のビジネスに通じる心得です。箱作りを手掛けて120数年という歴史を誇りに、社員と苦楽を共に新たな時代に挑戦していきます。第15代目となる青山祐一代表取締役社長は力強く語った。